

## 論文の内容の要旨

### 論文題目

「中国における『独立自主の対外政策』の形成 ——毛沢東時代から改革開放へ」

氏名 益尾 知佐子

### 【問題設定】

1970年代末、中国では「改革開放」が始まった。それまで長い間東アジアの政治的・軍事的対立の中心的アクターであった中国が、経済建設を国家の最大目標として掲げ、周辺環境の安定を追求し始めたことを転換点として、東アジアは冷戦の終焉に先立って比較的平和な経済的繁栄の時代を迎えることとなった。

1982年9月に正式に提起された「独立自主の対外政策」は中国の転身ぶりの象徴のひとつである。その柱として強調されたのが、「主権と領土の相互尊重、相互不可侵、相互内政不干涉、平等互惠、平和共存」の平和共存五原則をすべての国家との関係に適用し、各国との関係を発展させていくことだった。これは近代主権国家体制においては極めて一般的な国家間原則であり、「独立自主の対外政策」の提起——中国では単に「調整」と言われている——は海外では中国外交の「常識化」とも呼ばれている。本稿はなぜ中国があえてこの政策を掲げたのかという問題意識に基づき、「独立自主の対外政策」が改革開放の展開の中でいかに形成されていったかを検討した。

この改革開放については、中国の指導者には当初明確な改革への明確な青写真がなく、

その始動は極めて政治的な決定であったとされる。1978 年末の中共 11 期三中全会は一般に改革開放の始点とされるが、会議コミュニケに謳われたのは「対外開放」のみである。先行研究は改革開放の始動をめぐる国内政治の中で対外政策が果たした役割について十分な考察を行ってきたとは言えない。他方「独立自主の対外政策」の提起については、米中ソのパワー・ポリティクス面から説明を行う先行研究は多いが、なぜ中国外交が 1982 年にあえて「常識」的な新政策を提起したのかという問題に答えてはいない。

他方、「独立自主の対外政策」の成立に関する中国側の説明は、この政策転換がそれまでの中国の国際共産主義運動の取り組みへの総括を踏まえて実現したことを暗示している。本稿は毛沢東の晩年から改革開放初期にいたる中国の対外政策と国内政治との関連性について分析を行い、改革開放の始動をめぐる国内政治の展開について再検討し、さらに中国の指導者の対外認識の変容に着目しながら「独立自主の対外政策」が形成された過程を考察している。

### 【仮説と内容】

本稿は次のように仮説を設定する。1978 年末、鄧小平は毛沢東の対外政策に理論的に依拠して対外開放を発動した。しかしその直後の中越戦争の衝撃を契機として中共内部で毛の対外政策への見直しが始まった。これは党全体の脱イデオロギー化を促進し、外交面では「独立自主の対外政策」の形成をもたらした。(序章)

本稿はまず、建国以降の中国の国際共産主義運動への取り組みを概観し、その上で文革後期における鄧小平の復活の過程と対外活動について検討した。1969 年の国境紛争でソ連への警戒を高めた毛沢東は米国に接近し、米国を含めた世界各国を「一条線」(一本の線)のように団結させてソ連を牽制する「一条線」戦略を打ち出し、三つの世界論を提起してソ連を階級の「主要敵」と規定し、新戦略を理論的に正当化した。毛が新しい反ソ政策の担い手として起用したのが、かつて中ソ論争で功績のあった鄧小平であった。鄧は毛の意向に忠実に従って「一条線」の強化に尽力し、鄧が国内政策で毛と意見を違えたときも、

毛の鄧への外交面での信頼は揺るがなかった。この作業を通して、鄧小平は毛沢東の対外政策の正統な後継者として位置づけられる。(第1章)

次に本稿は鄧小平による1978年の権力奪回の過程を検証する。鄧小平は1976年春に再び失脚したが、毛の死後の1977年夏に政治復活を遂げた。当時ソ連はアフリカ、中東、東南アジアなどに勢力を伸張し、中国は警戒を強めていた。これを踏まえ、鄧はイデオロギー的な「理論」に基づいて内外政策を策定する党内の伝統的な政治手法を政権奪回に活用した。つまり毛晩年の「一条線」戦略の成果を強調し、現在ソ連の脅威が拡大しているからこそ、西側先進国が対ソ牽制力として中国の強大化を望んでおり、西側の助力を得てソ連の脅威を封じ込めながら迅速に国内の経済建設を進めるチャンスが訪れていると党内で主張した。中国とソ越両国との関係は鄧の指導権の確立に並行して緊張し、鄧は1979年2月に中越戦争を発動した。(第2章)

中越戦争は必ずしも中国が想定していたような成果を生まず、かつての「同志」ベトナムへの攻撃は中共党内に大きな衝撃を生んだ。本稿は次に、中越戦争後に党内で行われた国際共産主義運動への総括について分析する。運動が終焉したという認識の下、中国の指導者はまず兄弟党との党際関係のあり方への見直しに着手した。さらに毛沢東の功罪を評価した「歴史決議」をめぐる党内大規模討論と並行して、1981年春までに毛沢東の対外政策の「理論」的な絶対性を否定した。それ以降、中国の全体的な政策策定においてイデオロギーの作用は大きく後退した。また中国の指導者はこの過程で、階級ではなく主権国家を国際関係の中心的なアクターに位置づけ、国益確保を国家の最大の課題として再設定し、国際秩序は国家間の勢力均衡によって維持できるとする対外認識へと転換した。ただし毛沢東の対外政策に鄧が深く関与した経緯により、以上の見直しは鄧の権威を擁護しながら極秘のうちに進められることになった。(第3章)

続けて本稿は、このような対外認識の転換が中国の実際の対外行動を変化させ、「独立自主の対外政策」の提起を導いたことを分析する。国際関係における国家主権の重要性を再確認した中国の政策指導者にとって、対米関係の動揺は最初の試金石となった。ソ連を依

然中国の安全保障にとっての最大の脅威と認識していた鄧小平は、米国との戦略的協力関係の維持を強く望んだ。しかしレーガン政権が台湾への先進的兵器の売却の意向を示すと、鄧はこれを重大な国家主権侵害と認識した。1981年夏から1982年前半にかけ、中国は米国との戦略的関係維持のため国家主権問題で米国の譲歩を求めたが、米国側は逆に対ソ戦略の重要性を強調して中国に譲歩を迫った。1982年夏、鄧は国家主権の擁護を対ソ戦略に優先させ、米国との協力を断念して対外関係を調整する決定を下した。直後に開かれた12大で、中国は近代主権国家体制に全面的に則った「独立自主の対外政策」を正式に提起し、ソ連とは緊張緩和を図り、第三世界に接近し、勢力均衡によって国際秩序の安定を目指す政策転換を行った。(第4章)

最後に本稿は『人民日報』を用いた簡単な言及頻度分析を行って以上の分析との整合性を検証した。そして中国外交史の視点から「独立自主の対外政策」の形成過程を振り返り、毛沢東の晩年から改革開放初期にかけて、中国の対外政策がプロレタリア国際主義を前提としたものから近代主権国家体制に全面的に依拠したものへと性質転換を遂げたと指摘した。(終章)

#### 【本研究の特徴】

これまで中国政治および中国外交の研究においては、毛沢東時代と改革開放時代の質的な差異が強調され、双方の関連性はほとんど検討されてこなかった。本稿は対外政策が毛の死後の国内政治の展開に果たした役割を取り上げ、当時の党内政治におけるマルクス・レーニン主義的な「理論」の作用や中国の対外政策の変容といった問題について再考した。これによって本稿は、外交を切り口として二つの時代の連続性や関連性を指摘し、静的なイメージで捉えられがちな中国外交の変化のダイナミズムを考察した。

本稿は改革開放時代の最高指導者となった鄧小平に分析の焦点を置き、毛沢東の対外政策への鄧の関与について詳述した。国内政策で両者が意見を違えたことを根拠として、通説は両者の考え方や政策の差異を強調してきた。しかし本稿の分析は、むしろ対外政策に

おける両者の一致点を浮かび上がらせ、鄧が毛の対外政策を用いてかつて毛に批判を受けた国内政策を理論武装し、党内権力の掌握に活用するとともに、中国を改革開放の新時代に導いたと指摘する。1978年の時点では、イデオロギーはなお中国政治に大きな影響力を持っていたと考えられる。

本稿はさらに、毛の対外政策の延長として発動された中越戦争の衝撃によって、党内で対外政策への再検討が開始されたとし、この過程で毛の「理論」の絶対性が否定され、経済政策を含めた中共の全体的な政策策定が脱イデオロギー化したと指摘する。この再検討を踏まえ、対外政策においては階級よりも主権国家としての立場が全面に打ち出されるようになった。しかし改革開放時代の最高指導者となった鄧が毛沢東外交の申し子であったため、中国はその後も毛の対外政策を公式に否定することができず、新政策を「独立自主の対外政策」と名づけて対外政策の毛沢東時代からの一貫性を強調し続けたと分析できる。

本稿のもうひとつの特色は、豊富な党史関連資料や内部資料と中国国外の情報を組み合わせ、先行研究でほとんど検討されてこなかった中共の対外関係（党際関係）の変容について分析を行っていることである。本稿は特に党際関係の実務機関である中共中央対外連絡部の活動に光を当てており、中越戦争後に中共がどのように党際関係を整理したかを検討し、国際共産主義運動をめぐる党内討論が中国外交の性質転換に結び付いたことを裏付けている。この作業によって本稿はまた、最高指導者の意向に必ずしもそぐわない対外政策の転換（「一条線」戦略の放棄）が、対外関係に従事する外交実務者たちの作用によって実現したことを指摘し、中越戦争後の対外政策をめぐる党内討論が対外政策決定における実務者の役割の拡大につながったと示唆している。